

新発見の木簡—7世紀に遡る最古級の伝世品— 東京国立博物館で初公開

東京国立博物館には現在、明治11年(1878)に皇室に献納された「法隆寺献納宝物」が所蔵されています。このたび、東京国立博物館と奈良文化財研究所による共同調査によって、館蔵資料から献納宝物の一部と考えられる木簡8点が確認され、書かれた文字の書風や内容から7世紀に遡る可能性の高いことが判明しました。これは、出土品以外の伝世品としては最古級の例となります。

発見された木簡は、幡(ばん)と呼ばれる仏教の儀式で用いた細長い旗の芯板に転用されていたものです。幡の芯板に二次利用されたことで、奇跡的に残った貴重な例です。

木簡に書かれている内容は、漢文の長詩である「千字文」の習書や、尼僧の名前、さらに塩などの売買記録などで、古代の寺院生活をうかがうことのできる極めて重要な資料であり、今後の研究が期待されます。

発見された木簡8点は、8月23日(火)～9月19日(月・祝)まで、東京国立博物館 法隆寺宝物館第6室で公開いたします。

■新発見の木簡について

(1) 発見の経緯と伝来

木簡8点は、和紙に包まれ、160点以上の幡芯板とともに箱に納められていました。包まっていた和紙には「第四 新羅墨」(「新羅墨」は正倉院の宝物)と朱書きされており、これらが正倉院に置かれていた時期があったとわかります。

法隆寺献納宝物は、明治11年～15年(1878～1882)まで正倉院で保管されていました。明治12年の「法隆寺献納物の麩芥櫃」という記録には「幡木材片 壹括」との記載があり、これが今回見つかった160点以上の幡芯板に相当すると考えられます。

保存のよいものを見ると、両端が斜めに削り取られており、木簡としての使用を終えた後に二次加工を施され、芯板に転用されたことがわかります。

(2) 7世紀に遡る最古級の伝世木簡

発見された木簡には「月生(つきたちて)」という日付を記す際の特徴的な用語が書かれていますが、これは7世紀の資料にしかみられないものです。その古めかしい書風とあわせて、この木簡の年代が7世紀に遡ることを示しています。木簡は遺跡からの出土例が一般的であり、地中に埋まることなく現代まで伝わった古代の伝世品は、8世紀の正倉院の例のみが知られていました。今回発見された木簡にはこれよりも古い7世紀のものが含まれており、伝世品としては最古級の貴重な例です。

木簡(もっかん)

墨書のある木片のこと。遺跡から出土する文字資料の一種で、古代の伝世品(地中に埋もれることなく現代まで伝わった資料)は、唯一、正倉院の例のみが知られる。現時点で出土品の最古の例は、630年代頃の木簡が確認されている。

法隆寺献納宝物(ほうりゅうじけんのうほうもつ)

奈良・法隆寺に伝来した飛鳥から奈良時代を中心とする仏教美術作品群。廃仏毀釈から宝物を守り将来に伝えるため、明治11年(1878)に皇室に献納された。日本に仏教が根付いた黎明期の作品を多く含み、日本文化史上にも貴重な資料である。第二次世界大戦後は一部が国有財産となり、現在は東京国立博物館に保管され、法隆寺宝物館で公開している。

<東野治之氏コメント>

このような資料が残るのは、正倉院を除けば、法隆寺以外に考えられない。7世紀末に、寺院でも物品管理や法会の役割分担、漢字漢文の学習などに、広く木簡が使われていたことを証明する資料だ。幡の芯板には新材の立派なものも多く、廃棄木簡の芯板が使われたのは質素な幡だろう。法隆寺には古く中宮寺の文化財が移されており、尼関係の木簡の存在を考慮すると、すべてが法隆寺のものとは限らず、中宮寺伝来品も含まれるだろう。

(東野治之/とうのはるゆき:東京国立博物館客員研究員、奈良大学教授・日本古代史専攻)



【表】 月生十五日売俵十一得直七秤□五秩其□

【裏】 □□塩七十尻又布一執久皮四十買□□

長さ302mm、幅27mm、厚さ5mm

物品の売買の記録と考えられる。表冒頭の「月生」は、日本では7世紀の資料にしか事例のない用法で、この木簡が7世紀に遡ることの根拠として重要。

* 積読…奈良文化財研究所史料研究室

<本プレスリリースに関するお問合せ、取材のお問合せ>

東京国立博物館広報室

担当: 高桑・鬼頭

TEL: 03-3822-1111(代) FAX: 03-3822-2081

E-mail: pr@tnm.jp

奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室

担当: 渡辺晃

TEL: 0742-30-6837 FAX: 0742-30-6830

E-mail: shiryo-labo@nabunken.go.jp